

「ものぐさ大学」平成15年度最終講義概要

ものぐさ太郎の比較文化論

松本大学 学長 中 野 和 朗

新村といえば、何と言っても、“ものぐさ太郎”です。「名は体を表す」と言われますが、この“太郎”という名は、日本の男の子の名前の代表で、女の子は、“花子”と相場は決まっています。これが、また、たいへん良い名前なのです。昔から有名な太郎さんといえば、「金太郎」、「桃太郎」、「浦島太郎」に止めをさします。みんな日本の英雄です。共通点は、気が優しいということです。ドイツの太郎は、“ハンス”（Johannesの愛称、おめでたい・愚かな男の意がある。“Hans im Glück”「おめでたハンス」グリム童話）ですし、ロシアの太郎は“イワン”（「イワンの馬鹿」：ロシア民話に取材したトルストイの童話。正直すぎて馬鹿と呼ばれていた主人公イワンが悪賢い人たちの策謀にうち勝って幸福になり、ばかの王国を築いて人々を幸せにする話）です。イギリスではジョン（John）、フランスでは ジャン、イタリアでは ジョバンニ、スペインでは ファンです。いずれも、Johannes（①イエスの12弟子の一人。ヨハネ福音書、ヨハネ黙示録の著者。②洗礼者ヨハネ。イエスにヨルダン川で洗礼を施した。）の愛称です。

“ものぐさ太郎”は、「信濃の民話」によれば、“あたらしの里”に住む“ずくなし”ということになっています。「食べ物の心配もしなければ、仕事の心配もせず、体にはノミ、シラミがたかるにまかせ、『何を考えているのか毎日空を眺めて』暮らしておりました。・・・地頭の左右衛門尉信頼が、土地をつかわすから百姓をしたらどうか、と言うと、いやだと言います。では、もとでをつかわすから商いをしたらどうかと言うと、いやだ、と言います。そう言う太郎の『眼は清らかに澄んで、一かけらのいやしさもありません』と書かれています。（『日本の民話1. 信濃の民話』未来社 1970 はなし：笹部 赤羽鴻一郎、再話：松谷みよ子）

太郎は他の普通の人とは変わっている“変わり者”－アウトサイダー－です。夢想的な人間であり、世間的な私利私欲、名誉栄達に無関心であり、成長するに従って詩的才能を開花させ、真っ当な人間へと成長します。

これは、ドイツ教養小説の主人公達の像とよく似ています。

ドイツ教養小説 (Bildungsroman 又は Entwicklungsroman)

「教養小説」というのは、ドイツ文学独特のジャンルです。その代表的なものに次のようなものがあります。

ヘルマン ヘッセ (1877~1962) 「ペーターカーメンツイント『郷愁』」ヘッセを有名作家にした作品。：一人の青年詩人の青春の彷徨を描いた小説。夢想的な少年。不器用、多感。他の普通の少年とは違う生き方。失恋。物質文明への違和感。人生遍歴の中で人間として成長する。都会人になれない人間。

ノヴァーリス (1772~1801) 「ハインリヒ フォン オフターデインゲン『青い花』」：「純正な真の詩」または「根元的な愛」の象徴と考えられる「青い花」を求めての夢想的な青年の人生の彷徨

徨。詩、芸術への傾倒、詩の賛美。

ゴットフリート ケラー (1819~90) : 「緑のハインリヒ」 夢想的な少年。自然への親和感。不器用な生き方しかできない人間。さまざまな失敗の多い人生体験の中で芸術の世界へ。不幸な恋愛体験。貧しさと無為な生活。芸術の世界から決別して実社会へ。政治的公的奉仕活動へ。

グリーンメルスハウゼン (1620~1676) 「ジンプリツイシムス『阿呆物語』」 : Simplicissimus

〈きわめて単純な者の意〉無智であるが純真な少年が、30年戦争 (1618~1648) の時代背景の中で、波乱に満ちた人生体験を経て人間として成長してゆく。

アイヒェンドルフ (1788~1857) 「Aus dem Leben eines Taugenichts『のらくら者の生活から』」 : 真面目に働くことをしない変わり者。父親に愛想をつかされて家出をし、人生の彷徨が始まる。「イタリアでは神様が何もかもしてくださって、人間はただ日向で寝転がっていればよい」と言う話を聞いて、イタリアへゆき、数奇な運命を辿る。厳しい現実の生活から遊離した一種の夢物語。

教養小説の中の主人公たちは、“自分の人生を生きて” います。世間体、とか周囲を気にして、自分でない人生を生きるということをししない生き方、マイペースの生き方を貫徹しています。そして一人一人の個性を実現させてそれぞれの人生を全うしています。

昔話への一つの解釈：小澤俊夫：「昔話が語る子供の姿」(古今社2002年)「昔話の主人公は、最初だめな人間であるということがとても多いのです。話の前半ではだめな人間、みんなより劣っている人間、ばかにされている人間である。それがストーリーの展開の中で力を発揮して、幸せを獲得していく、そういう物語が多いのです。代表的な主人公は寝太郎です。・二つのメッセージ。一つは、あの寝太郎はたっぷり寝ていたけれども、一生寝ていたわけではないというメッセージ。もう一つは、寝太郎は前半であれほどたっぷり寝たからこそ、後で知恵が出せたというメッセージです。」「実人生の中では忘れがち、あるいは見落としかちな、そういう人間の変化を昔話は短いストーリーにしてはっきり見せてくれている」

もう一つの視点：「昔話というものは象徴的な物語で、ある何かを間接的に伝えようとしていることを語り示している。昔話のなかに象徴的に語られているさまざまな事柄の意味を読み解くことによって、その共同体の生活や習慣・信仰体系などを知り、また、そのような昔話自体の果たす共同体における機能を考察することができる。」「(日本昔話研究集成1。「昔話の社会的機能をめぐって」本多典子、小松和彦 名著出版)

ものぐさ太郎とあたらしの郷の関係から見えてくるあたらしの郷の像^{すがた}

のらくら者の変わり者である太郎にたいする村人たちの態度は次のとおりです。太郎は、なにもしないのに飢え死にすることもなく生きていて、ということは、あたらしの郷の村人たちが、飢え死にしないだけの食べ物を与えているからです。そのことが、「ある日のこと、情け深い人が気の毒に思って大きな餅を五つくれました。」という行為に象徴されています。村人たちは、のらくら者の太郎を決して差別したり、侮ったり、虐げたりしていません。だから、太郎は、ここから追い出されることもなく住んでいるのです。このことから判ってくることは、あたらしの郷のひとつとは、夢想的な詩的才能を秘めている者への理解があるということなのです。

地頭の態度からは次のことが判ります。地頭というのは、あたらしの郷の行政責任者です。地頭の左右衛門の尉信頼は、思いやりのある、優しい心を持った武士で、太郎とことばを交わしている内に「こいつ見所のあるやつ」と見抜きます。そして、太郎を庇護します。「ものぐさ太郎に毎日三合めしを二度食わせ、酒を一度飲ませよ」というおふれをだします。村人たちはあきれますが、このとおりにして太郎を養います。このことから、あたらしの郷にはよい施政が行われていたことがわかります。

以上のことから、あたらしの郷の人々は、この善政のもと、勤勉で、心優しく、文化・芸術への高い関心と理解をもっていることが、読みとれるのです。そのよき伝統・慣習・人情が21世紀の“あたらしの郷”にいまも継承されているのです。新村の魅力はここにあります。“マツショウタンダイ”は、まさに“ものぐさ太郎”の現代版といってもよいでしょう。